

「第2回徳山ダムモニタリング部会」審議内容メモ（案）

日 時：平成18年7月25日（火） 13:30～16:30

場 所：名古屋通信会館 3F 桐の間

出席者：（委員）駒田部会長、阿部委員、西條委員、中村委員、野平委員、
藤田委員、前田委員、松尾委員（五十音順）8名
（事務局）24名（一般傍聴）2名（報道機関）2社

【審議内容等】

1. 委員の変更について

佐藤正孝部会長の委員辞退に伴い、フォローアップ委員長より、駒田格知委員（名古屋女子大学教授）が部会長に指名されたことが報告された。また、野平照雄委員（自然学総合研究所研究員）が委員に指名されたことが報告された。

2. 前回（第1回）部会の審議内容等の確認

第1回モニタリング部会（平成17年11月21日）の審議内容を確認した。

3. 徳山ダム建設事業の進捗状況について

徳山ダム建設事業の進捗状況について報告がなされた。

4. モニタリング調査計画について

モニタリング調査計画（案）を了承する。なお、審議するなかで以下の指摘がなされた。

- 1) 猛禽類については、ダムの湛水前後でデータをきちんととった事例がないので、繁殖状況調査、行動圏調査及びCCDカメラによる繁殖活動の記録によりモニタリングしていくことが重要である。
- 2) オオムラサキは行動圏が広いので、連続性にこだわらず、エゾエノキの活着に適する場所を主に考えて移植場所を選定すべきである。
- 3) 水没する河道の物理環境データについては、試験湛水前までにできるだけ資料を揃えておくべきである。
- 4) 将来の貯水池に生息する魚類について、外来種の侵入を抑制する対策を講じるべきである。
- 5) ダムの供用により、ダム下流河川では流況の安定と攪乱頻度の減少のために水際植生に変化があると考えられる。また、ダム湖岸では微気象の変化も含め森林に変化があると考えられることから、植生変化のモニタリングを行うことが重要である。また、河川水辺の国勢調査（ダム湖版）につなげていくことも考慮すべきである。
- 6) 水質については、湛水後、濁質の粒度分布が変わる可能性があることから、SSと濁度の関係を把握すべきである。
- 7) モニタリング調査の結果については、それを積極的に環境保全やダム管理に反映しうる仕組みを構築しておく必要がある。

5. 審議内容の確認

本日（平成18年7月25日）の審議結果を本メモに基づいて確認した。

以 上